

2017 年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞受賞

周囲の友人に着目した着席位置と学習意欲の関係性

経済学部1年 安藤 蒼亮

周囲の友人に着目した着席位置と学習意欲の関係性

1. はじめに

多くの学生は大学の講義室へ入る際、「どの席に座ろうか？」と考えるであろう。例えば、講義室に入ると、後方の席にグループで固まった学生がよく見られる。彼らは授業中に、集団で私語をしたり、スマートフォンを触ったり、居眠りをしたりしている。着席行動と学習意欲の間には関係があると指摘する文献は多い。しかし、それらの多くは、学生の授業内容に対する興味や、教員の教え方との関係のみに着目し、友人との関わり合いという要素を考慮していない。多くの学生が周囲の友人と共に授業を受けている中で、友人がどこに座っているか、友人と共にどのように学習に取り組んでいるかなどといった友人に着目する視点は、着席位置と学習意欲の分析において重要なものである。本調査の目的は、学生へのアンケート調査を行うことによって、共に授業を受ける友人との行動に着目して、着席位置と学習意欲の関連性を明らかにすることである。

2. 文献調査

大学生の着席行動についての研究は、着席位置と成績の関連性の研究や、着席位置と授業意欲の関連性などの研究がなされている。成績との関連性は、前方の席の方が資格試験に合格した割合が高く（江間 2016）、授業意欲との関連性は、前方の席の方がより意欲的であり（松井 1992）、コメント量も多い（臼井 2017）といった研究結果が出ている。また、学生は親密度の高い人物がいる場合、ほぼその側に着席する傾向がある（高畠・城 2001）が、自分の好みの席に友人がいなかった場合、好みと友人とどちらを重視するのかは明らかになっていない。さらに、学生の着席行動は、教員とのスペーシングと関係している（北川 2003）。これは、学生の教員に対する支持度合いが学生の着席行動に表れているというものである。北川（2003）の研究から、教師に対して親しみをを感じる学生は前方に座り、親しみを感じていない学生は後方や端に座ることが明らかになっているが、授業に対する興味と教員に対する親しみのどちらが着席行動においてより優先されるかは明らかになっていない。そこで本研究では、周囲の友人の行動と絡めながら、これらの着席行動について明らかにしていく。

3. 調査方法

大学生の着席行動の意図について調査するため、アンケートを作成した。なお、着席位置を選択する質問については、北川（2003）の調査でも使われた質問を一部変更したものである。北川（2003）の調査では、席のゾーンにおいて左端と右端を同じ両端のゾーンとしていたが、今回の調査では分けて質問した。これは、調査の着席する場所として想定されている名古屋大学経済学部棟のカンファレンスホールの教壇が、前方の中央ではなく、向かって左寄りに位置しているからである。そのため、同じ両端でも教壇と学生の位置が異ならないよ

うに、左端と右端に分けて調査している。

調査対象は、経済学部1年生の学生である。調査の対象となる場所を1つに絞るため、経済学部の学生に限定した。

4. 調査結果

名古屋大学経済学部1年生総数約200人のうち、同一の語学科目を履修している38人にアンケートの回答を依頼し、35人(男25人、女10人)から有効回答を得た。残りの3人については、未回答の質問があったため除外した。

まず初めに、対象者に普段の授業でどこに着席しているかを質問した。席のゾーンは、以下の図のように①前方、②中央、③左端、④右端、⑤後方の5つに分別した。

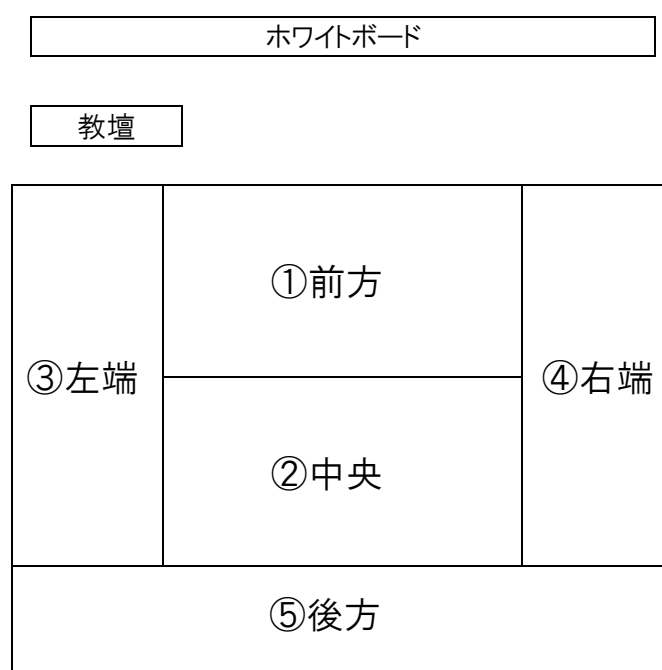


図1 カンファレンスホールの見取り図

調査結果は、右図のようである。
実際に座る席の人数では、後方の席が17人と圧倒的に多かった。次章では、この席の場所によって分けて分析していく。

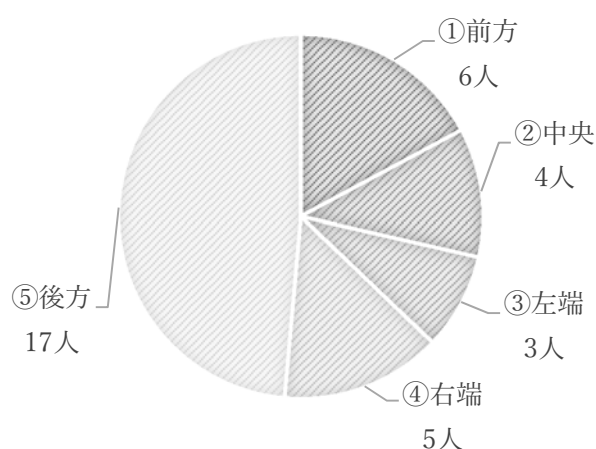


図2 実際に座っている場所の人数

(1)着席位置と周囲の友人の関係について

ここでは、普段の授業において周囲の友人がどのように関わっているのかを実際の着席位置で分別した。まず、「あなたは授業中、周囲の友人の逸脱行為（授業中に寝る、内職をする、スマートフォンを触る等）が気になったりしますか。」という質問を行ったところ、結果は以下のようになった。

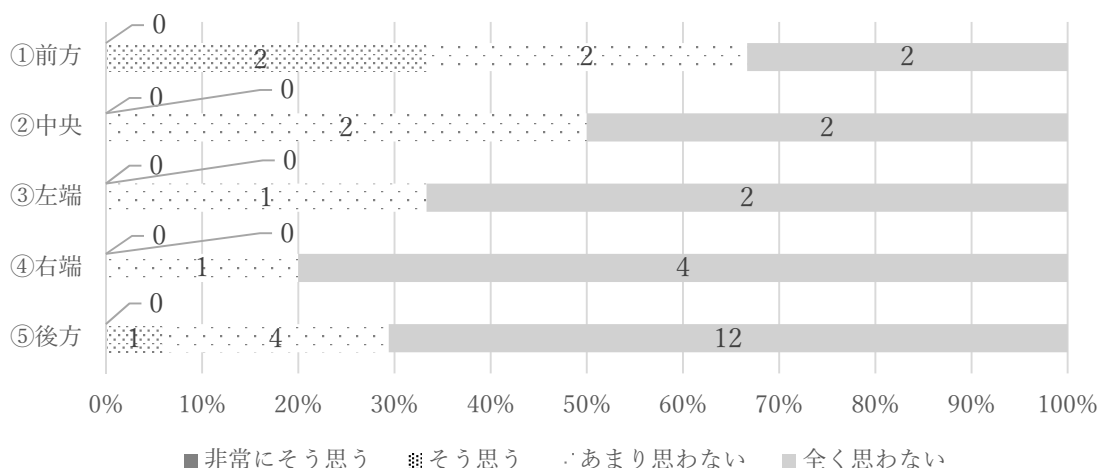


図3 着席位置と友人の逸脱行動に対する意識の関係

①から④にかけて、「全く思わない」と答える人の割合が増加している。このことから、教壇から離れるほど、周囲の逸脱行動が気にならない人が多くなることが分かる。このことは、教壇から離れるほど集中力が低下し、周囲の逸脱行為が気になるであろうと予測していた筆者にとって、意外な結果であった。しかしながら、皆が逸脱行為をしているのだから自分がしても問題ないであろうと思ったと仮定すると、納得できる結果であると思われる。

次に、「あなたは授業が終わった後に、友人と授業の内容について話したりしますか。」と質問を行ったところ、結果は以下のようになった。

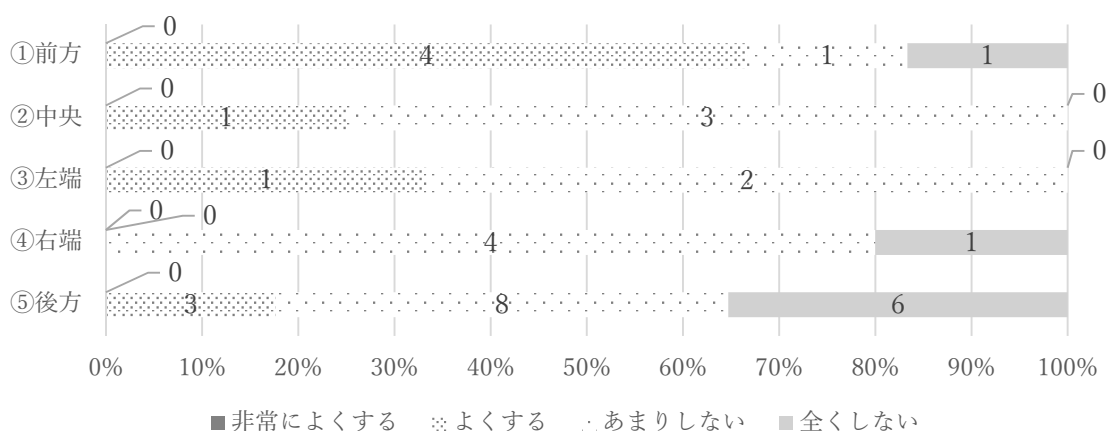


図4 着席位置と友人と授業内容について話す頻度の関係

前方の①と後方の⑤のゾーンを比べると、前方の①の方が授業内容について話す頻度が多い。このことから、前方の方がより授業に対して意欲的であることが分かる。これにより、松井（1992）の研究結果が再現された。それでは、後方に座っている学生はいかにしてテスト勉強を行っているのだろうか。

そこで、「あなたが定期試験対策をする際、共に授業を受けている人と勉強会などを行ったりしますか。」という質問を行ったところ、結果は以下のようになった。

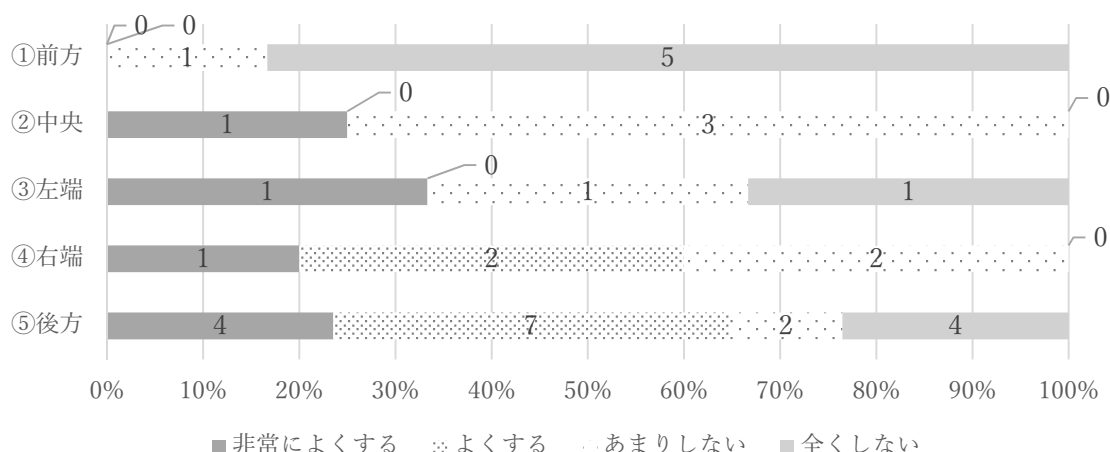


図5 着席位置と友人との勉強会の頻度の関係

①から⑤にかけて、友人と勉強会を「非常によくする」、「よくする」と回答した人の和の割合が増加している。このことから、後方に座るほど勉強会をする傾向があることが分かる。これは、後方に座る人は授業への興味、集中力が低下しているため授業の内容を理解しきれず、授業内容の共有を必要とすることから生じる結果なのではないかと思われる。

(2)着席位置を変更する要因について

ここでは、ある架空の授業の初回授業において1人で着席するとき、どこに座りたいかを順位付けして回答してもらった。結果は以下のようである。

	1位	2位	3位	4位	5位
①前方	9%	0%	0%	0%	91%
②中央	23%	23%	14%	40%	0%
③左端	9%	31%	40%	17%	3%
④右端	14%	40%	29%	17%	0%
⑤後方	46%	6%	17%	26%	6%

表1 初回の授業で座りたい席の順位

1位に選ばれたゾーンを見ると、後方が1番人気で、中央が2番人気であった。このこと

から、初回の授業でまだ教授の素性や授業の内容が把握しきれていない場合、中央や後方に着席するという傾向が見られることが分かる。また、左端と右端を比較すると、右端の方がより人気が高かった。このことから、初回の授業の場合、同じ端でもより教壇に近い席を選択する傾向があるということが分かる。それでは、授業によって着席位置はどう変わるのだろうか。

次に、前述の授業が以下のような授業であった場合、次回からどこの席に座りたいかを選択して回答してもらった。

- (A) この授業の担当者があなたにとって親しみがもてない教師だった場合
- (B) この授業の担当者があなたにとって親しみがもてる教師だった場合
- (C) この授業があなたにとって興味の無い内容だった場合
- (D) この授業があなたにとって興味のある内容だった場合
- (E) この授業の教師には親しみがもてるが、内容には興味がない場合
- (F) この授業の教師には親しみがもてないが、内容には興味がある場合

調査結果は、以下の表のようであった。

	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)
①前方	2	5	2	6	2	3
②中央	2	11	3	14	7	11
③左端	3	3	1	3	3	4
④右端	7	5	5	5	5	5
⑤後方	21	11	24	7	18	12
合計	35	35	35	35	35	35

表2 場面による座りたい席の人数

(A)、(C)のように授業がマイナスの誘意性を持つ場合、人気は後方のゾーンに集まり、(B)、(D)のように授業がプラスの誘意性を持つ場合、人気は前方や中央のゾーンに集まった。これには、北川（2003）が述べるように、前方の学生は「教師との相互交渉を積極的に望んでおり、課題に対しても強い興味と動機を抱いている」一方、後方の学生は「教師との対人交渉を避け」ることを望み、「課題に対しても逃げ腰で消極的」とであるという姿が表れていると言える。

また、(E)、(F)のように教師と授業の内容の誘意性のプラスマイナスが不一致であった場合、授業の内容がプラスの誘意性を持つ方がより前方に人が集まることが分かる。このことから、学生がより前方の席を選択するのは、教師への親しみの有無より授業への興味が優先されるのではないかと推測できる。

ここまでは、北川が行った研究と同一の内容であったが、ここで別の観点から着席位置の意図を考える。その観点とは、いつも共に授業を受ける友人の着席位置が自分の着席行動に

影響を与えるかどうかというものである。そこで、友人が自分の意図しない席に座っていた場合、友人の近くに座りたいかどうかの程度を聞いたところ、調査の結果は以下のようになった。なおここでは、自分の座りたい席と友人が座った席が異なる場合の感情を調べるため、表1で1位に選ばれた着席位置で分別している。

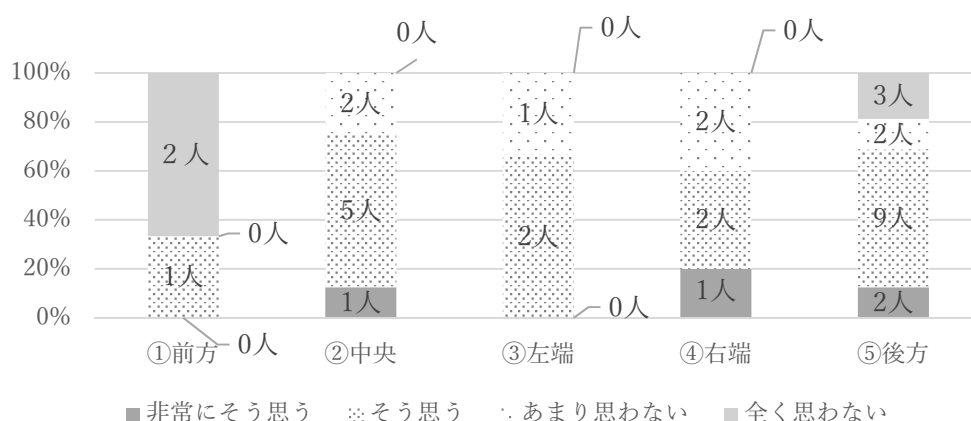


図6 1人で座る場合の着席位置と友人と共に座りたい感情の程度の関係

上のグラフから、前方を除き、「非常にそう思う」と「そう思う」を合わせた割合は6割から7割程度であり変わらなかった。このことから、前方のゾーンを好む人は友人の位置に関係なく前方に座る傾向があり、その他のゾーンを好む人は着席行動が友人の座る位置に影響されることが分かる。北川(2003)の研究では、前方の席に座る人は授業の内容と教師への親しみに関わらず、同じ席に座り続けるという研究結果が出ているが、友人の着席位置に関しても、同様に前方の席に座る人は同じ席に座り続けることが分かった。

5. まとめ

今回の調査によって、2つのことを明らかにすることができた。

第1に、着席位置で分類を行うことで学生の授業に対する姿勢を友人との関わり合いから読み取り、後方の席に座る人の多くは普段の学習意欲の低さから来る勉強不足を、勉強会などを通して穴埋めしているということが分かった。第2に、友人の着席位置が自分の着席行動に影響を与えるかどうかを調査することで、普段から興味関心を持ち、教師への親しみも持つ前方の席を好む学生は、友人の着席位置に影響されことなく前方に座り続ける一方で、中央や後方を好む学生の着席行動は、友人の着席位置に影響されやすいということが分かった。このように、共に授業を受ける友人の行動から、着席位置と学習意欲の関係性を読み取ることができるのである。

学生の着席行動は、多くの教える立場の人々にとって興味深い内容であると思われる。今後、様々な観点から学生の着席行動について明らかにしていくことが必要である。

参考文献

- 臼井博 (2017)「大学の試験成績に対する非認知的要因の影響―授業に対する積極的関与（エンゲージメント）と着席行動の影響」『札幌学院大学総合研究所紀要』4, 61-71
- 江間直美 (2016)「広報人材の育成と教室着席行動に関わる考察―着席位置と授業中の理解度チェックの成績との相関から」『江戸川大学紀要』27, 205-217
- 北川歳昭(2003)『教室空間における着席位置の意味』風間書房
- 濱島啓子・城仁士 (2001)「大学生の教室における着席行動」『神戸大学発達科学部研究紀要』9 (1) , 147-158
- 松井洋 (1992)「大学生の学校適応と授業態度に関する研究」『川村学園女子大学研究紀要』3 (1) , 147-165